

毎月11日掲載

第77回ワークショップ @宮城・七ヶ浜 笹山地区

むすび塾

参加者は海抜約20mにある笹山地区の眺望広場に集合。眼下の高台には、サーファーが波乗りを楽しんでいた。住民は鮮やかなオレンジ色の旗3本を海岸に向けて広げ、津波避難を呼び掛ける誘導の訓練をした。続いて、集会所機能を併せ持つ笹山地区避難所に移り、話し合った。旗の推進役住民で、七ヶ浜町政策課長の荻野繁樹さん(56)は「高台移転後も住民が防災意識を持つのが重要。被災した私たちが今度は誘導する側に回らなくては」と狙いを話した。

笹山地区住民でつくる自主防災会が旗を振る場所に想定しているのは高台の5カ所。笹山地区副区長の鈴木亨さん(64)は「一危険な場所まで誘導はできない。住民は浜に降りないのが大前提」と説明した。

高台は海岸はサーファーに人気で、高台には海水浴場は2017年、本格再開した。元高台海水浴場監視員で、のり養殖業渡辺正さん(74)は

オレンジ旗 普及目指す

高台移転住民が避難誘導

河北新報社は4月22日、通算7回目の防災巡回ワークショップ「むすび塾」を宮城県七ヶ浜町の笹山地区で開いた。同地区は東日本大震災の津波で家も失った住民が高台移転した。近くの高台海水浴場を訪れる海水浴客やサーファーにオレンジ色の旗を掲げて津波避難を呼び掛ける取り組みを進めており、住民ら8人が旗普及に向けたアイデアを語り合った。

■むすび塾に参加して



【役割を明確に】自宅があった高台は津波で1軒残らず流された。いつか来ると思っていたが、これほどは。高台移転した自分たちが海にいる人を避難させるために住民こそで賛同した。旗振り、マイクで呼び掛けるなど分担を明確にし、実効性ある方法を模索したい。笹山地区副区長・伊藤政治さん(74)



【行政支援も必要】最初に避難した花沢浜の寺で、ラジオで津波の高さを知った。さらに高い広場に避難し、47人全員が難を逃れた。防災活動が盛んな地区で、日頃の訓練が生きた。旗を使った避難誘導は住民の安全確保が第一。活動継続には手弁当では限界がある。行政支援も必要だ。笹山地区副区長・鈴木亨さん(64)



【旗の浸透図る】幼いころから津波の話が教えられ、防災は習慣として身につけている。だが海水浴客はそうとは限らない。本格的に海開きした昨年は天候が悪かった。今年は客が増えるかもしれない。旗の意味を理解してもらえよう、行政も交えて地道な活動を続けたい。笹山地区分館長・遠藤敏彦さん(62)



【浜で旗目立つ】震災前に高台の監視員を務め、今は浜のイベントに参加している。海岸では音があまり聞かれないが、旗が目立つ。誰にでも役立つ知識なので普及させたい。津波で失ったものは多いが自分には海しかない。浜の安全を守る取り組みを進める。元高台海水浴場監視員・渡辺正さん(74)



【夏の対応課題】海水浴シーズンには町外から子どもも含めて大勢来て駐車場もいっぱいになる。そうした時に津波警報が出たら避難誘導はパニックになりかねず、対応が課題だ。旗の知名度をもっと高め町全体で取り組むたい。被災者の言葉はインパクトがある。七ヶ浜町消防団女性班長・相沢りり子さん(66)



【旗広め恩返し】オレンジ旗の取り組みを七ヶ浜に遊びに来る人たちと共有しなければいけない。逃げる重要性を分かってもらうことが大事だ。笹山地区の取り組みが東北や首都圏にも伝わり、各地で津波避難誘導を考えるきっかけになれば復興支援の恩返しにもなる。笹山地区事務局長・伊丹順子さん(49)



【客守る行動大切】震災後に七ヶ浜町に移住しレストランを営む。仲間と音楽とスポーツ関連イベントも開催している。塾に参加するまで防災意識は決して高くなかった。客の安全安心を守ることは主催者側の責任でもある。すぐに仲間と対策を話し合いたい。USEA・SAW運営会社代表・久保田靖朗さん(35)



【住民の力で推進】震災から7年経過し、被災の教訓を次に生かそうという気持ち強い。伝承は行政ではなく住民がやるべき。旗を使った津波避難誘導の取り組みを進めることで、住民が前に進むきっかけになるのではないか。変化、進化して発信していきたい。七ヶ浜町政策課長・荻野繁樹さん(56)



オレンジ旗を使った津波避難誘導について活発に議論する笹山地区住民。宮城県七ヶ浜町笹山

「多くの海水浴客がいる場合、誘導役などをあらかじめ決めておく必要がある」と指摘した。課題は旗の持つ意味をどう住民以外の来訪者に知らせ、認知度を高めるかだ。オレンジ旗発祥の地で、震

災後に七ヶ浜町と交流を続ける神奈川県鎌倉市七里万葉の「七里万葉七ヶ浜復興支援隊長」の中里成光さん(48)は「地域では限界がある。連もかさむ海水浴客らに寄付を募ってはどうか」との意見もあり、検討を確かめた。

震災後移住し、七ヶ浜町高台のカフェレストラン「SEA SAW(シーソー)」の運営会社代表を務める久保田靖朗さん(35)は「海辺でイベントを開催しているが、防災意識をもっと高める必要がある。ネットで情報発信したい」と強調。笹山地区事務所

の伊丹順子さん(49)も「町高めた」と意気込んだ。七ヶ浜町では東日本大震災で死者4人、行方不明者2人、1323世帯で半壊以上の被害があった。地震発生から6分後に津波が町内沿岸を襲い、高台海水浴場では最大12.1mを観測した。語り合いの中で参加者は命がら津波から避難した状況も振り返った。

消防団のポンプ車で避難を呼び掛けている途中に津波に襲われた相沢りりりさんは「波に流されていく途中、家屋の柱で右足を骨折した。自覚も痛みもなかったが、立つことができず、腹はいつか死ぬかと思った」と語った。

「妻と孫の3人で逃げようとしたが、七ヶ浜町では東日本大震災で死者4人、行方不明者2人、1323世帯で半壊以上の被害があった。地震発生から6分後に津波が町内沿岸を襲い、高台海水浴場では最大12.1mを観測した。語り合いの中で参加者は命がら津波から避難した状況も振り返った。

参加者からは、避難体験の教訓として「早めの行動が肝心」との声が上がり、「一車での避難や二次避難について、あらかじめ家族で確認しておこう」「自主防災組織が円滑に機能するように議論を重ねるべきだ」と備えを確かめ合った。

外の人に旗の意味や重要性を伝えたい」と訴えた。「旗が小さい」との意見もあつたが、大きくすると費用もかさむ。海水浴客らに寄付を募ってはどうか」との意見もあり、検討を確かめた。

住民も旗の普及に向けて、思いを新たにした。笹山地区分館長の遠藤敏彦さんの62は「旗を知らない住民もいる。常時掲げるなどしてアピールしたい」と語った。

七ヶ浜町では東日本大震災で死者4人、行方不明者2人、1323世帯で半壊以上の被害があった。地震発生から6分後に津波が町内沿岸を襲い、高台海水浴場では最大12.1mを観測した。語り合いの中で参加者は命がら津波から避難した状況も振り返った。

消防団のポンプ車で避難を呼び掛けている途中に津波に襲われた相沢りりりさんは「波に流されていく途中、家屋の柱で右足を骨折した。自覚も痛みもなかったが、立つことができず、腹はいつか死ぬかと思った」と語った。

参加者からは、避難体験の教訓として「早めの行動が肝心」との声が上がり、「一車での避難や二次避難について、あらかじめ家族で確認しておこう」「自主防災組織が円滑に機能するように議論を重ねるべきだ」と備えを確かめ合った。

七ヶ浜町のオレンジ旗を使った避難誘導は、津波で被災した住民が、自分たちの安全を確保した上で、外から来る人に目をつけて、鎌倉は高さ15mの津波が来るなどの想定もある。旗による避難の発祥地とされるが、震災前から防災活動が盛んな七ヶ浜に比べ、住民の認識はまだ不十分だ。

海水浴客らに危険知らせる

被災住民自ら実践



眺望広場の訓練で、海に向けてオレンジ旗を掲げ、避難を呼び掛ける。宮城県七ヶ浜町笹山



眺望広場の訓練で、海に向けてオレンジ旗を掲げ、避難を呼び掛ける。宮城県七ヶ浜町笹山

宮城県七ヶ浜町の笹山地区は、防災集団移転促進事業で造成された約10分の高台住宅団地。町内で5カ所の団地として2015年3月に完成した。124世帯458人(18年4月1日現在)が住み、約6割を占める高台地区の元住民を中心に、花沢浜地区の元住民なども移住した。

「津波防災の日」に合わせ、高台に移転した被災住民による避難誘導訓練が始まる。高台に移転した被災住民による避難誘導訓練は全国的に珍しく、伊藤政治さんは「サーファーや海水浴客を誘導することで、全国にも津波を知らせる手段として有効とされ、全国の自治体」に恩返ししたい」と語った。

眺望広場の訓練で、海に向けてオレンジ旗を掲げ、避難を呼び掛ける。宮城県七ヶ浜町笹山

東日本大震災の体験を振り返り、専門家と共に防災の教訓や避難の課題を語り合ってみませんか。町内会や学校、職場など10人前後の小さな集まりが対象です。開催費用は無料。随時、開催希望を受け付けています。連絡先は河北新報社防災・教育室022(211)1591。

東北大災害科学国際研究所准教授 佐藤 翔輔さん(36)

旗の意味浸透不可欠

東日本大震災や熊本地震などの被災地や大震災が起ころとされている地域以外に、被災地と異なる地域に避難する住民は、防災の知識が少ない傾向がある。オレンジ旗の誘導対象はそういった人々が中心になるだろう。旗が機能するためには①掲げられること②意義を理解し、残すことが重要だ。

七ヶ浜発七ヶ浜復興支援隊長 中里 成光さん(48)

活動の趣旨胸に響く

七ヶ浜町のオレンジ旗を使った避難誘導は、津波で被災した住民が、自分たちの安全を確保した上で、外から来る人に目をつけて、鎌倉は高さ15mの津波が来るなどの想定もある。旗による避難の発祥地とされるが、震災前から防災活動が盛んな七ヶ浜に比べ、住民の認識はまだ不十分だ。

助言者から

解していること、二つが必要だ。旗は意外と小さく、海から旗の文字を読み取るのは難しい。色ははっきり見える。住民や海水浴客に利用者に呼び掛け、意味を浸透させてほしい。